

きぶらのまち

NO.47 月刊

第四輯 城址篇 第四号

昭和廿六年十二月一日発行

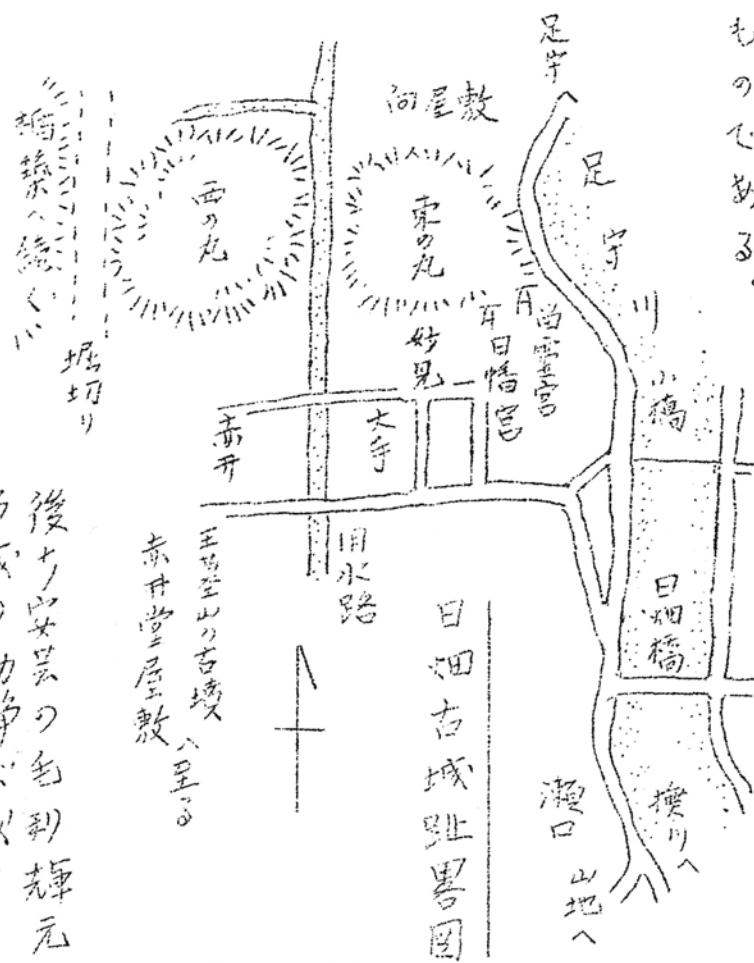
(非売品)

発行所 岡山県都窪郡吉備町東町三五字垣方

吉備親光協会

○日畑古城址

この城址は庄村の日畑西組の大手にある。天然の小丘を利用して築城したものである。要害という程ではないが南が大手となり、北から東へ足守川を控えて搦手になつてゐる。西は幅十五米の堀切りを設けて、插築山へ峯繞となつてゐる。城郭の構造は東の丸、西の丸にわたれ、その間は南北に幅十三米の用水路が通つてゐる。これは後年掘鑿したもののである。



後、安芸の毛利輝元に従つた。一中国兵記に「当城の勤静が載つてゐる。それによると、永禄四

東の丸は現在、藪に包まれ、長さ五十五米、幅三十六米、高さは十米位、これが出丸で西の丸が本丸である。東の丸の北側底地を俗に向屋敷という。これは昔の侍屋敷のあとと思はれる。敷地は十アールばかりである。

この古城は永禄、天正の乱在時代に日畑六郎兵衛景親といふ武士が據守した。始め備前の宇喜多直家に属してゐたが

年(一五六〇)の頃に備前の龍ノ口城主撮相治部元常は天神山城城主浦上景の攻撃を受けた時、六郎兵衛景親は後詰として出兵し浦上勢を阻止し、武功をたてた。その後十七年にも再び浦上氏は大軍を率いて先年の耻を雪がんと龍ノ口城に攻撃を加えてきたが、この際も景親は備中の将士を督勵し救援に赴いて散々に敵軍を破つて退却せしめた勇將である。(この龍ノ口城は岡山市高島の山頂にある。城址は拡大して三、四ヶ所の段取りみ岩峯に造つてゐる。本丸は北に面した旭川に臨み、断崖絶壁の要害である。本丸には八幡宮がある。一で一つに八幡丸ともし、現今は眞實者が多く、入学試験には靈験があると。撮相元常は文明年中全川城主松田元成の麾下であつたが、松田氏が宇喜多氏に滅ぼされて帰順したのである。天神山城址は赤磐郡佐伯町(旧和氣郡山田村)にある。吉井川に沿ふた山嶺にして郭敷の頂上に細長く配置され、峻峻にして稀れにみる城地である。城主浦上宗景は永禄四年(一五三〇)播磨の三津からここに移り備前美作を占領し、四十余年在城したが、その臣宇喜多直家の反計によつて、天正七年三月(一五七九)攻め落された。城址は荒廢のままにそと残礎が遺つてゐる。宇喜多直家は天正八年(一五八〇)安芸の毛利元就との盟約を破り、備中を攻畧せんと大軍を進めた。この時日畑城主六郎兵衛景親は宇喜多氏を去つて毛利氏に従属したので、毛利氏は上原右衛門大夫元祐、東島刑部通房等の驍將を加勢として守備し、よく防戦に努めたので、備前勢は容易に接ぐことが出来ず備前へ退却した。三年の後同十年四月に至つて羽柴銃前守秀吉が中国を征服せんとして大軍を備前に進めた。宇喜多直家(直家の子)を備前として備中に押寄せ、先づ安芸勢の配置する諸城に攻撃を開始した。これが天下に有名な高松城水攻の合戦の序幕にして足守川を挟んでいさゝか一大攻防戦がくりひろげられる。備中に入った秀吉は始め龍王山(高松稲荷山)に本陣を構えた。この日畑城は足守川の西岸に迫り、毛利軍の本陣、日差山に続き小城では

あるが地形上容易に攻落しがたし、ことを察した秀吉は、城主景親の助勢として毛利氏から遣はして、上原右衛門元祐と豫め内應の約束を結んでいたので、秀吉は宇喜多氏の家臣、花房助兵衛、戸川平右衛門の二人をして最速に実行するよう催促せしめたので、元祐は部下數十人を連れて不意に景親を取巻き討たんとしたが、却つて景親のために二人は切り伏せられ、三人は手負はされた。レカレ多勢のため、終に元祐の振う槍先にあ込まれ、景親は無慚な最期を吐いた。ここに城中は総崩れになつて、宇喜多の軍勢は潮の堰を切つたように、どつと城内へ突入し、刻のうち、城は陥落した。

この元祐は小早川隆景の妹婿にして二心のないものと思つて、たゞ義に叛き不忠の振舞に隆景、元春等は大いに怒り、軍勢を繰出して城を奪回せんとしたが、ここに安國寺忠瓊という家臣があり、隆景に進言して、いふには強引に出馬することは不利である。もし主力を傾注すれば必ず秀吉もこれに應じて自ら陣頭に采配を振うに違ひない。こうなると味方は少勢であるから十中の一は、九は勝算の鬼ははなれ、戦いである。いま少し考慮せられればと。諫言した。元春、隆景は秀吉が自ら出陣することこそ本望であるが敵は布陣を堅固にして容易に出くかや交へることを好まないようである。レカレ挑戦してくれば、唯一撃にレて撃滅せんのみだ。この日畑城は地形上敵に渡すことは作戦上不利である。こいつて安國寺忠瓊の諫言を即坐に却けて備中の諸將中の勇者と認はれて、梅崎彈正忠元兼を總司令として備中、備中の軍勢を勤負したのである。こうなると備前勢は必ず羽柴美濃守秀長の軍に意援を求め、に相違はない。もし秀長が来援するようなら、二に深慮すれば、隆景の旗下の精銳をこれに充てる計画をたてていた。万一秀吉

の二方部隊が行動を始めた。始めような気配があらば、更に元春、元長、経吉の父子二人が揃つて総出陣して対峙し、ここに一大決戦を試みる覚悟であつた。部下の將士もその決意を聞き傳へ、今日こそ西軍の雄雄を決する秋である。と皆我先にと功名手柄をたて、史筆にその名を載せ、賞禄を賜はり、武功のほどを後世に遺さんもの、と勇氣百倍。日畑城奪回の軍は條々進軍した。



景つて、シリノと城を目覓けて、峯傳いに攻め寄せた。これを察した城中の宇喜多氏の臣、長船守正福曰、秀吉から遣はされた、た横枝の木村早入佐等は援軍を俟つて、應戦に移らんとした。か、到來せず、強いて戦はば徒らに城兵を損傷するのみである。寧ろ後事を期して、城を明け渡すにレなす。干戈を交へおれて、備前へ退却した。

ここで記したことは、裏切者の上原右衛門元祐は一時東軍に降し、戦後京都に浪蕩の身となつていたが、不義のことがあつて、主君と離れ、不遇の生活を送りついに嗣をなくし、絶えた。

この合戦は備前勢が秀吉に進言し、中園勢は少勢であるから、もし日畑城を奪還してきた場合は、是非後詰して載きたい。備前勢の一万余

千余をもちて敵兵を阻止するが、元春が後続してくれば、どうか秀吉の旗本より御如勢が頼んだ。元春は御者から來援したが、方勢で、手兵を兼駈に擯じないよう心がけ陣中に控えて戦況を窺望し容易に行動を起さなかつたという。と申された。秀長の助言もあつた。この時秀吉は立田山に陣を移して、たが、このことを削いて何故か勝をたたいと大笑し、一戦してもよい。と返事したが、備前勢が不利になつても援軍は來たらが、やむなく城を放棄したのである。安芸軍は再び入城しほうほうの陣で退却しつある味方の状況を遠望しなむら秀吉は空しく過ごした。これは宇喜多氏の家臣どもの意見を待つほどの秀吉ではない。大争の前の小事、思ふ所があつたのである。

思ふに高松城水攻の結果から窺察すれば、日畑の城は敵の本陣日差山の高地に山繞となり固守は困難である。高松城に主力を集中して水攻の策を講じここに持久戦を展開して毛利氏の主力を誘ひ出して一決戦を試みんとする計画であつた。と察せられるのである。

一宮吉備津宮神宮大森家の古文書に
今度備中撫川表出陣為見廻御戦候處に折節及合戦付而御手抽之程警目候誠ニ御社家之儀候に御心付之程不淺候猶御恩賞之程重而直家可波相討候 恐々謹言
五月二十一日
神主 大森 殿 御宿所
七郎兵衛尉 忠家 (花押)

尚この名紙に、
是ハ宇喜多七郎兵衛忠家ノ御折及み備中撫川貝原方構ヲ直家御忠義御取つめ候時音信ニ奉候折節合戦候つる時ノ狀也 藤兵衛かたへとあり。忠家は直家の舎弟にして、藤兵衛とあるは一宮神宮大森藤兵衛幸統のことである。五月廿一日は天正十年で高松城水攻の緒戦であつた日畑城攻撃の時と考へられる。撫川の貝原方の構えを陣營にして、いる忠家のもとへ、一宮の社家と其の連中が陣中見舞に、左に左敵上品を差上げている時、一宮に戦術が始まりその加勢に働きなにか功をたてたので私狀を兼収して、後日直家から恩賞を授かるよう取り計らうという御書を遺書である。貝原方という屋敷が、撫川地内のどこにあつたか、姓名も地名も遺つて居らざり確めることは困難である。次に直家は昨手すむに死去して、一般には知らせなかつたのである。

○ 松島古城趾

松島古城趾
庄村の松島に二つの丘阜がある。東の山を射敵山といひ、ここに古城趾がある。西の山を荒神山と呼び五社八階宮の鎮座する處で、いまは西鬼神社といつてゐる。

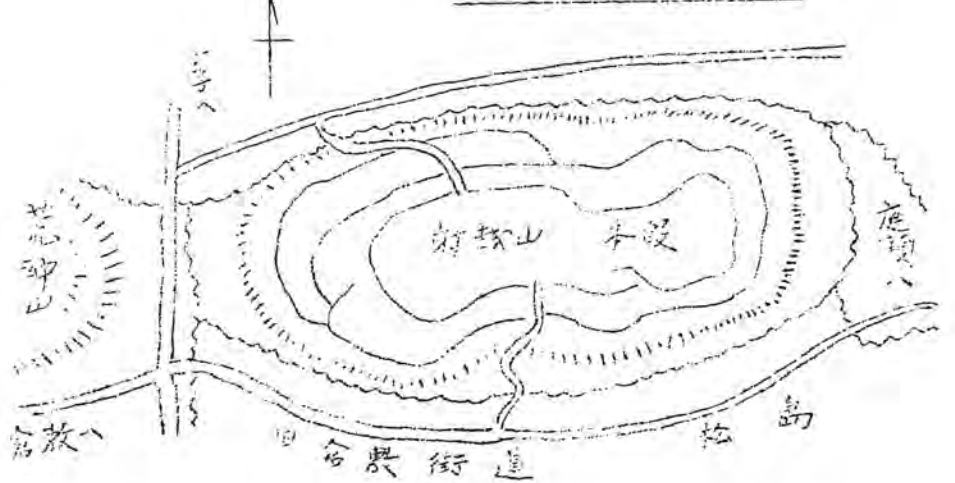
この二つの山の間は一筋のわりによつて境せられ、山はソグれも高く、たが、周囲は一面の田圃で往古は海面であつたので松島の名が起つた説である。昔は万寿庄と呼べ、此万寿年間(一四一〇一五三六)に拓けた地である。城趾は俗に城山といひ、登路百米、周囲四百九十米。地名を城の内、中央の寺を本段と呼び、段取りのあとと思はれるものか、いくつか認められるが、残礎などは遺つておらず、今は全部耕作せられ、菜園になつてゐるので城趾といへば想像もつかない。しか、眺望に富み南麓を回國道が東西に走り、城山といふ地名もあり昔は要衝の地であつたらうと思はれる地形を攝成して、その首肯せられる。

この城史にフゝいての傳記は、近しいが、毛利、宇喜多両軍の動靜を綜合すると、天正八年宇喜多約は毛利氏との攻守同盟を破つて、織田信長と

結成、中國征伐の先鋒を約したのである。

元末毛利氏はその先祖は大江山元から十二代後々の毛利元就が、土内氏に仕へて安芸の國、猿掛城に居た。当時備前は宇喜多氏、山隈には尾子氏、又出雲、因幡、伯耆を領し、大内氏は石見、安芸、國防、長門、豊前、筑後の六ヶ國を領し、富強天下に列せられた。そこで元就は主君のあだを報せん、その子隆景の策を用ひ、嚴島に城築して晴賢に備えたので、晴賢は弘治元年の冬、先づこの城を攻めた。元就は龍風の烈しい夜に來じて、奇襲をかけ陶氏を滅した。これにより大内氏の領地を治め、ついで尾子氏を滅して山隈を保ち、備後備中をも風靡して十ヶ國の太守になつたが、元就は危篤二年六月十四日七十五歳で吉田に没した。法名、奥州前司贈三品十州太守日親洞春之居士といふ。ここに於いて、毛利輝元(輝元は元就の孫、父の隆景は四十一歳で永祿六年八月に死す)は備前の身成に備へて備中の警備を嚴にし、松島城を築いて、その部將梨羽中務丞を配置した。手始めに天正八年の秋、一万五千余の大軍を備前に進撃せしめたが、一宮村の幸川であへなく大敗して備中へ退却した。この戦を信に幸川崩といふのである。(第四輯戰爭篇幸川の合戦参照) この敗退に對連して松島城も備へを失ひ、一戦も交へずして城を開け、逃げたので宇喜多氏は梨羽左衛門尉を城番として守備せしめた。その翌年に小早川隆景は幸川の敗戦を挽回せんと再び軍事行動を起し、松島城を奪還して田によつて梨羽中務丞を城代に置き、加勢として芸州の三吉藩後守に数百騎を添えて、應援せしめ、主力は鬼島方面の手薄に乘じて先づア川千左衛門秀安の立籠る常山城に攻撃を加へた。かの有名な蜂谷の一本槍に、宇喜多共太郎基家は討死した(第四輯戰爭篇蜂谷の合戦参照)ついで羽柴秀吉の大軍は宇喜多氏を御道すとして、中國侵略の軍を進め、吉備の野は亂雲將に急を告げるのである。

松島古城跡



松島の毛利軍は戦時上徹廢し、繞々足守川の線に轉進し、高松城の水攻防備は堅められた。松島城の勇士も前線に進み、後詰としてわづかなる備隊を配置せられた。この地は過ぎない。戦後和睦によつてこの地は宇喜多氏の有となり、間もなく廢城となつた。

○鷹巣古城跡

庄村の山地から松島方面へ通ずる街道の北側に「安政二年卯十一月建之」「衆起人坂野屋東藏」「毘沙門天道 從是十三町」と刻した道標がある。ここから北へわかれる道を辿つて行くと山地の部落に入る。間もなく左に曲る道をとつていくと、「三餘塾遺蹟」と刻した大飼松窓先生の旧邸がある。山地八百八十五番地に、今尚長屋門と母屋はそのまゝの姿を在している。この長屋は母子を教養した部屋にして、大養木堂も幼時庭遊の川入から毎日通學し、松窓先生に師事した處である。地主は先生の玄孫にあたる大飼諒吉が嗣いだ。路は段々畑の間を縫ひ、登る細い山道に、吉備の盆地が次第に眼下に展つて見え始まる。数百米にわたる山道に、巨石が起伏し、一勝區を占む。この山地を抜けるに、松島方面へ通ずる街道の北側に「安政二年卯十一月建之」「衆起人坂野屋東藏」「毘沙門天道 從是十三町」と刻した道標がある。ここから北へわかれる道を辿つて行くと山地の部落に入る。間もなく左に曲る道をとつていくと、「三餘塾遺蹟」と刻した大飼松窓先生の旧邸がある。山地八百八十五番地に、今尚長屋門と母屋はそのまゝの姿を在している。この長屋は母子を教養した部屋にして、大養木堂も幼時庭遊の川入から毎日通學し、松窓先生に師事した處である。地主は先生の玄孫にあたる大飼諒吉が嗣いだ。

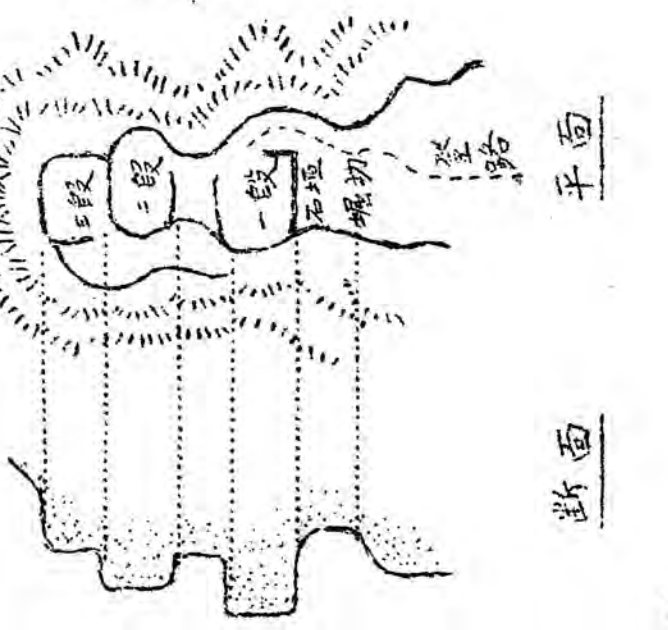
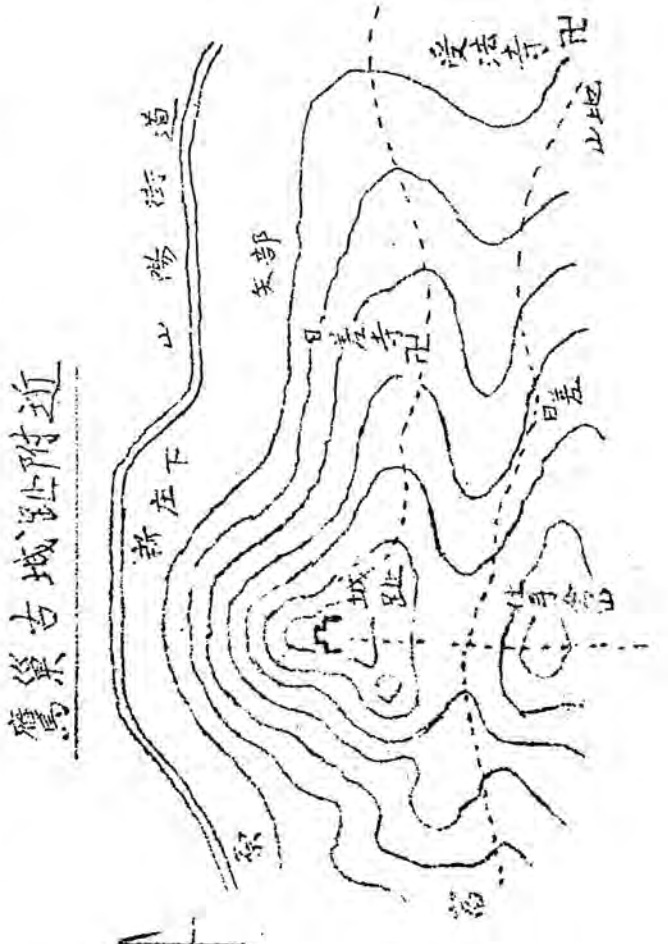
してゐる。

ここは奈良朝時代佛教の聖なる頃に建てられた、日差山廿二坊のあつた旧趾にしろ、いまは電沙天王を祭る日差山日差寺が往時の名残りを止めてゐるのみである。この谷間を俗に勝負谷という。昔深手時代の古戦場と傳へられ、谷の行詰つた處に古の石碑がある。これを僅人はトモモリ様の墓といつてゐるがその由来はもとよりわからぬ。道は次第に細道になつてこのトモモリ様の墓の前を通り、山手村の宿へ越える峠に出る。ここから右へわかれ道を辿ると山頂となり、ほどなく鷹巣城趾に達する。

城趾は庄加茂・山手の三村の境界点にして、三方は絶壁になつてゐるのど何の遊るものもなく漂渺たる吉備の平野に高松城合戦の戦場地を一瞬に収めることが出来る。城郭は北に突出した峯の部分を三段にわけ、曲輪を設け、南の峯繞りからの視界を避けるために堀切りをつくり、そのお砂をもつて正面に高く墨壁を設け少レばかり石垣を築いてゐる。曲輪に至るただ一筋の細道はこの墨壁の東側を迂迴して通ずるようにつくられてゐる。

この簡單な築城工事は天正十年の彼に小早川隆景が、羽柴秀吉の采攻に備へて早急に適當な場所を選んで陣所を設ける必要に迫つて、天然の要害を利用し、山頂を一時的に地ならしした程度に止めたのである。従つて戦後はその必要がなくなつたので、廢城にされたのである。

加茂古城趾
城趾は高松町加茂の中央、中須賀という處にある。俗にこの地を「城」といつてゐる。現在は田圃となつて跡形も遺つてゐないが、僅かに半敵歩ばかりの小丘の上に一小祠を祭つてゐる。



これが本丸のあとである。文献をみると創築はわかりなないが、備前・備中の境に近く山陽街道を扼し昔は要衝の地である關係上、戦国時代に毛利氏がここに平城を構へ、備前の押へにされたものと推定せられる。天正十年の彼には部将の上山兵衛助元忠が西の丸に、当國の武士生石中務、同僚四郎が東の丸に據守した。

飲食物式

皆様の足は

よしや旅館

吉備タタシ

山陽線庭瀬駅前電三九

庭瀬駅前電 58 310 350 番

(おはり) 二の丸未だ元